

第 43 回 日本放射線技術学会秋季学術大会 印象記

前田 幸人
Maeda Yukito

第 43 回日本放射線技術学会秋季学術大会に参加したので、大会の印象を報告する。

高松から金沢までは 6 時間近く掛かる。高松から快速マリナーライナー岡山行きに乗り瀬戸大橋を渡り、岡山から新大阪までは新幹線で移動した。新大阪からはサンダーバードで金沢まで移動し、金沢駅に到着したのは 21 時 30 分頃であった。金沢は江戸時代、大名中最大（江戸幕府を除いて）の 102 万 5 千石の石高を領した加賀百万石城下町として栄え、人口規模では江戸・大坂・京の三都に次ぐ大都市だったので、歴史好きの筆者には一度は訪れてみたい場所であった。加賀藩の藩主は前田氏であることから姓が同じ私は常に意識してきた街であり、早朝や休憩時間中に金沢城趾や近江町市場などに出向いたが、いずれも期待したとおりの素晴らしい場所であった（写真）。

本大会は、金沢文化市民ホールで 2015 年 10 月 8～10 日の日程で開催された。大会テーマは「All you need is Rad (Radiology). 一活かし、活きる、放射線技術―」であった。大会長は、金沢大学医薬保健研究域保健学系の市川勝弘先生であった。市川先生は本大会の挨拶で、放射線技術の発展に寄与するためには放射線技術を科学し続けることが重要であり、そのためには基礎技術から正確に習得しこれを応用し、医療において活かすことを目指すべきだと述べられている。筆者も基礎技術こそが日常診療を支えると考えている。これらの基礎技術は自施設の努力だけでなく、本大会のような学術大会に参加し、ほかの施設の方と議論することで更に優れたものとなると思う。よって今後もより多くの



写真 学会場近くの尾山神社前で研究仲間と記念撮影
(左から 1 番目が筆者)

方に日本放射線技術学会の学術大会に参加いた
だきたいと思っている。

筆者は本大会で一般演題核医学 PET（基礎）の座長を務めるとともに、主に核医学の一般演題発表を聴講した。筆者が座長を務めたセッションは 4 演題あり、そのうちの 1 演題は FDG-PET と MRI における定量性についての班報告であった。班報告は本学会の学術調査研究班が、個人で研究するには困難な研究課題について全国からエキスパートを募り共同研究を通じて成果を上げて報告されるものである。この報告は、悪性腫瘍の診断や治療効果の判定に有用な PET の判定量指標である standard uptake value と MRI の拡散係数 (apparent diffusion coefficient: ADC) についての他施設共同研究であり、表示付認証機器や MRI 専用のファントムを用いることにより施設間の定量値コントロールが可能であることを示されていた。

本大会の核医学関係の演題数は口述発表 40 演題、ポスター発表 11 演題であった。筆者が

特に興味を持ったのは、小児核医学検査についての研究発表であった。現在の小児コンセンサスガイドラインは日本核医学会小児核医学検査適正施行検討委員会により作成されたものである。これは欧州核医学会の方式を基本として、本邦で小児に対して使用される放射性医薬品を取捨選択し、現状の使われ方を考慮して適正投与量の基準を決定されている。この投与量は、従来と比較し全体的に少ない量に設定されているため十分な画質が得られず、正確な評価ができない可能性がある。本大会ではそういった背景もあり、核医学小児の演題があった。班報告の中では倉敷中央病院の長木昭男先生が画質検証用の小児ファントムを使用した報告をされており、その実用性が示された。このファントムを用いた検討により、エビデンスのある収集・画像処理条件が構築されるのを期待する。一般演題発表では小児腎静態シンチ、小児腎動態シンチの検討を自作ファントムを用いてされており、非常に感銘を受けた。現在小児核医学検査の検討を行うために決められたファントムがないことからこういった努力が本当に必要であり、チャレンジしている先生方を応援するとともに自分でも検討を行わなければならないと思っている。

また最近では学生の発表が増えてきている。どの学生の発表もしっかりしており本当に素晴らしいと感じる。もちろん指導される先生方のおかげだと思うが、本人もずいぶん努力されていると思う。筆者の学生時代を振り返っても現在の学生のような発表はできていなかったし、現在でも学生にかなわない部分があると感じた。もっと努力が必要であることを痛感した。

またIT化も進み、最近の全国学会ではスマートフォンやiPhone、タブレット端末のアプリケーションが作成されている。このアプリケーションを取得し、ネットワーク環境が整っていれば学会のタイムテーブルや抄録内容を簡単に確認することができ雑誌を持ち歩かなくてよい。また主催者お知らせから遺失物の確認などを行うことができ、非常に便利になったと感じた。

特別講演は、長弘憲一先生（元 本田技術研究所主席研究員、SIP（戦略的イノベーション創造プログラム）「革新的燃焼技術」プログラム会議委員）による「変になれなかった技術者」であった。長弘先生は自身がホンダで行ってきたことを中心に話をされた。この講演で最も印象に残ったのは、成功者になるための4つの要件であった。その4つの要件とは、“スキルアップ”“仲間を集める”“世風を読み”“スポンサーを探せ”である。これを今の私の研究活動に当てはめると、“スキルアップ”は日常業務に追われるだけでなく論文を読んだり実験を行うこと、“仲間を集める”はともに勉強や研究を行い議論ができる仲間を増やすこと、“世風を読み”は現在の研究動向や今後期待されている研究などの情報を収集すること、“スポンサーを探せ”は科研費などの研究費を獲得することと考えた。正に今の筆者がしたいこと、しなければならないことを明示された気がし、これらの要件を満たすことができれば素晴らしい研究が行えると思った。これらのことを筆者に具体的に認識させてくれた素晴らしい講演であった。

最後に、学会のメインはやはり一般演題発表であると筆者は考えている。臨床での画質評価や工夫、臨床の場から離れた基礎的な検討など様々なものがある。これらの一般演題発表で報告される検討が1つでも多く論文になり、1つでも多く人の目に触れ、1つでも多く患者のためになることを期待している。

筆者の勤める香川大学医学部附属病院の核医学検査は、1週間の中で水曜日が最も忙しい。出発日である10月7日（水曜日）もいつもと変わらず検査が予定されており大変忙しかった。それにもかかわらず、業務を残して金沢に向かった。残りの業務を行ってくれた当施設の核医学部門の皆様へ感謝したい。

今回筆者を快く金沢に送り出してくださった香川大学医学部附属病院放射線部の皆様、また座長を務める機会を与えてくださった学会関係者の方に本当に感謝している。

（香川大学医学部附属病院 放射線部）